

[報告]

同志社大学大学院 総合政策科学研究科 ソーシャル・イノベーションコース 10 周年記念フォーラム ～学び究める！社会を変える知恵と技～ (2017 年 11 月 23 日) (その 3・完)

佐野淳也・新川達郎・西村仁志・中野民夫・宗田勝也・谷口知宏・
大石尚子・関根千佳・本多幸子・笠間浩幸・今里 滋 (登壇順)

はじめに

「ソーシャル・イノベーションコース 10 周年記念フォーラム」は、同志社大学大学院総合政策科学研究科に 2006 年より開設された「ソーシャル・イノベーション研究コース」が以来 10 年を経たことを記念して催行された。本コースは、2005 年度の文部科学省の「魅力ある大学院プログラム」(いわゆる大学院 GP) に採択され、2006 年に前期課程、2008 年には後期課程を開設することとなった。そして研究科のコース再編によって、2012 年度から前期課程はソーシャル・イノベーションコースとなった。

本フォーラムは、2017 年 11 月 23 日 (木・祝) の 13 時 30 分から、同志社大学烏丸キャンパス志高館 1 階 112 教室で開催され、当日は 120 名の参加があった。プログラムは 3 部構成であり、「第 1 部 同志社ソーシャル・イノベーション (SI) コースのこれまで」においては、「ソーシャル・イノベーションコースの 10 年の歩み」と題するスペシャルムービーの後、記念対談「SI コースを設立した思い & 10 年を振り返って」を行った。「第 2 部 ソーシャル・イノベーションコースのいま」においては、コースで学ぶソーシャルドクター達が語る研究と実践、特に社会人大学院の日常が語られた。「第 3 部 ソーシャル・イノベーター教育の未来」においては、教員や修了生多数の参加のもとにダイアログ「ソーシャル・イノベーター教育のこれから」が語られた。

上記プログラムの第 1 部については「その 1」として本誌第 20 巻第 2 号 (2019 年 3 月刊行) に、また第 2 部については「その 2」として本誌第

21 巻第 1 号 (2019 年 8 月刊行) に掲載された。本号では第 3 部について報告することとした。(新川達郎)

【第 3 部】

SI コースとソーシャル・イノベーター教育の未来

フィッシュボウル「ソーシャル・イノベーター教育のこれから」

佐野：そろそろ第 3 部の開始をしたいと思います。皆さん、お席の方にお座りください。第 3 部は円形でパネルディスカッションを行います。一番真ん中にパネリストの先生方、お座りください。そのほかは参加者の皆様、スタッフの皆様、真ん中の方から詰めてお座りください。好きなお席にお座りください。第 3 部のテーマは「ソーシャル・イノベーター教育の未来について語り合う」です。

ソーシャル・イノベーター教育のこれからと、今までの SI コースの過去、現在そして未来を語って参ります。パネリストと参加者によるダイアログです。今回も出演者が本当に多くて、1 人 3 分しかしゃべれないという設定になっております。パネリストを含めて 10 名です。さらにこれから 3 分という制限時間でウルトラマン並みのカラータイマーがついております。こういったテーマを掲げてやっていきたいと思えます。

では、はじめに新川先生からお話いただいて良いでしょうか？

新川：最初にこれからのソーシャル・イノベーションコースについて、ちょっとだけアナウンスと展望をお話したいと思います。同志社大学大学院総合政策科学研究科のソーシャル・イノベーションコース、今後どうするかということ、今、研究科、学部の先生方と一緒に検討しています。基本的にはこのソーシャル・イノベーションというのをきちんと将来ずっと維持をしていきたい、というのが学部研究科としての考え方です。ただし、当初、このコースをつくった主要メンバーがあと数年でいなくなります。言ってみれば、創業者の精神というのが全部消えてしまうということになります。さて、そうなったときにいったい何が残るかということで議論になっております。

大事なことは、やはり、一つはこのソーシャル・イノベーションコースというのが具体的な社会問題、それぞれ抱えている課題というのをきちんと大学院の学習の中でその問題に取り組み、そして、それを研究をして論文文化をする。そして、その成果をまた、それぞれの問題解決に持ちかえる。この基本的なパターンをなんとか維持したいというのが1点です。

そして、そのためにも2つ目にこの大学院のコースでは、先ほどの発表にもありましたけれども、さまざまな社会実験や社会実践、これを必ず義務づけましょうということを行ってきております。これがなければソーシャル・イノベーションコースでの教育にはならない。学位にはならない。ここが重要な2つ目のポイントです。

そして、3つ目にそれは誰が教育をやるのというのが話題にあがっております。いよいよこれからは、これまでソーシャル・イノベーションにかかわってこれなかった政策学部の先生方にも、大量にこの後ソーシャル・イノベーションコースの指導にあたっていただくということで、今、徐々にリクルートを始めている状況であります。とりあえず、まずはこれまでの基本的な枠組み、大きな方向は維持しつつ、ただし、そこで担い手がどんどん変わっていきます。その中でソーシャル・イノベーションの本来の姿というのをできるだけ枠組みとして失わないように、しかし、それがさらに新たな発展型に向かっていけるように作っていききたいということで、努力していることだけお伝えをしておきたいと思います。以上です。

佐野：新川先生、ありがとうございました。このフィッシュボールという円形パネルディスカッション方式ですが、金魚鉢を意味して、内側の円に座る私達パネラーは、いわば金魚です。そして外側の円に座って聴いていただいている参加者の皆さんは、金魚鉢の水槽ということになります。一方、内側の円にもいくつか空席イスが用意してありまして、まずは3分ずつ内側の円に座っているパネラーのみなさまにお話をさせていただきますが、1周した後はフリートークとなります。その際に「ぜひ発言したい」という方が参加者のみなさまの中から出てきましたらたら、自由に空いている内側の円の椅子に来ていただいでいて、発言していただくことが可能なシステムになっています。

それでは次に、西村仁志先生より、今やられていることや、SIコースの未来に対する期待について、3分間でお話ください。

西村：西村でございます。2部で登場した西村和代とは夫婦です。在任中、僕は2006年のコーススタートのときから、2011年まで5年間、教員として5年任期で担当していました。彼女の方も前期、後期、5年間、5年半おりましたので、教員と院生と一緒にいるという、そういうおかしな状況が家庭内でも続いていました。

2012年から、任期満了のあと、広島修道大学に移りました。そちらではソーシャル・イノベーションというより、どちらかという、環境教育というもう一つの専門の方を中心に教えています。

しかし、このソーシャル・イノベーションというのは、非常に重要なテーマですし、広島にとっても大事な営みに今ですになっています。中山間地域もちろんあるし、瀬戸内海の離島もあります。それから、もちろん、大きな産業集積もあるんですけども、住宅のことやら、子育てのことやら、あらゆる問題がやはり大都市ということで起きています。ですから、ソーシャル・イノベーション、広島にとってもとても大事なテーマや営みでもあるということです。

もちろん、今、担当しているのは学部生です。大学院はありませんので、18歳から20歳前半の学生たちを担当していますので、できるだけそういうイノベーションのエッセンスを植え付

けてと思っています。幸い、卒業生が始めていて、JA の職員になったり、それから、地域おこし協力隊に行っている人もいます。それから、子育て関係の NPO に就職したりと非常に若い、楽しい卒業生が出始めているところです。

一方で社会人向けに、今の SI ラボというのを始めています。まだ、オープンにしてないのですが、広島 SI ラボということで、自由な授業料のいらぬ学びをゼミ形式でひっそり今やり始めて、今後オープンにして展開していく予定です。今は実験的な取り組みをやっています。コンサルの職員になったり市役所の人だったり、いろいろ楽しい学びを夜にやっています。こういうインフォーマルな学びを、また、展開してくれるとうまくいけるかなと思っていますので、京都の動きとあわせて広島でも展開していきたいと思っています。(拍手)

佐野：すごい 13 分丁度でした。さすがです。ではつぎに、中野民夫先生、どうぞ。

中野：中野民夫と申します。西村仁志さんの後を継いで 2012 年から 3 年半ほど教員をさせていただきました。今、東京工業大学というところのリベラルアーツ、人としての教養を広げようというところで、奮闘をしております。昨日、着任して 2 年で大仕事をやりまして、学生、教員、職員、卒業生全員集合。東工大の未来を語り合う、大ワークショップというのを、本当にこんな職種を越え、年齢を越え、18 歳から 60 代終わりぐらい 70 代ぐらいまで 200 人ぐらいのワークショップをして、東工大のいいね、と思うところとか、ちょっとな、と思うところだとか、これからどういう理想像があるかということとか、そこには何が必要で何をやりたいか、というのをやってきました。話すだけではなくて、そこから新しい種をまきたいと思って、いろんなアイデアとプロジェクトの種を募ったところ、17 人がわっと立ち上がって並んで発表してくれました。東工大生は非常にシャイな人が多いので、本当にみんなが感動するぐらいに熱い種がまかれて、非常にうれしく思ったところです。

それが始まったのも去年、執行部が 2030 年のことを考えるという会議を、ワークショップでやった方がいいといってくれる僕の同僚がいて、その執行部の中堅若手でワークショップをやった思いを、こういうパンフレットにまとめ

たことがあります。これは僕が博報堂という会社に前いて、そこのクリエイターに安くお願いして、ちょっとかっよく仕上がったのです。「ちがう未来を見つめていく」というステートメントがあって、このときは執行部とか選抜チームだけだったので、学生とか、本当に職員とかみんないろんな形で関わって大学はできているんだな、みんな来てもらいましょうよ、と、いって、先ほどの場ができたところです。

それで、ソーシャル・イノベーションを思い出して、5 つほどのキーワードでまとめてみました。一つは社会人が多いということです。社会を知っている人が多い。これは東工大と全然違って、向こうは 22、23 歳で来るので、これがすごく大きい。さっきの社会実験とか、本当に社会を変えていくということが中にインプットされているコースです。皆さん、志があるんですね。これについて東工大の教員は志をつくれと言っているのです。これは人から言われて育つものでもないのです。本当にここにいる方は志が大したもの。やっぱり、土の香りがすごくします。僕も有機農業塾に行かせていただいて、本当に食と命そして、料理に開眼いたしました。江湖館の存在がやはり大きいと思うのです。学び合いのコミュニティというのが本当にできていると思います。ゼミだとか、いろんなコースとか、そういう細かい世代とかを越えて、卒業しても関わり続ける人、今日もいろんな形でこうやってつらなっているのは非常にうれしいなと思っています。

やはり、わいわい「楽しい」というのが一番じゃないかなと思って、楽しくまじめにということはあると思います。楽しく、深いということもあると思うのです。それがここでは起こっているのではないかなと思います。(拍手)

宗田：改めまして、皆さん、こんにちは。宗田と申します。よろしくお願ひいたします。

私自身は 2012 年度に難民の支援をテーマに博士論文を書かせていただきました。そのときに今里先生から、東日本大震災が起こったときに、誰もが難民になり得る可能性がある、「潜在的難民」という時代に私たちは生きているということを教えていただいて、それ以来、「潜在的難民」という言葉を大切に、今もどういう角度から他者に向き合うのかということで、活動をしています。

難民というテーマで活動をしてきたのですが、最近では全国の大学生の方々と、日本で暮らす外国の人たちがどういう困難に直面したり、どういう可能性を持っているのか、ということ、を調べるというプロジェクトを準備して、そういう関わりをスタートしようとしているところです。

今年の4月から客員教員ということで、こちらで採用していただきまして、本当にありがとうございます。授業ではもともと私のテーマである人の移動ということ、を学生と一緒に学んでいます。その中で人が移動せざるを得なくなった、安全保障の問題に、今の学生の方々が非常に興味をもち、でも、あんまり、そういうことを学ぶ機会がないということに触れて、安全保障と一緒に考えると、もしくは外国人が日本社会でどういう可能性を持って一緒に暮らしていくのか、ということ、を考える授業を行っているところです。

これからも、ここで学ばせていただいたことを、学生の人に伝えて、ただ、学ぶだけではなくて、未来図を描くということにつなげられるかなと思っていますので、どうぞ、よろしくお願ひいたします。(拍手)

谷口：皆さん、こんにちは。谷口と申します。お茶どころ京都南は宇治田原から来ました。2007年度から2011年度まで5年間任期付きで教員でお世話になりました。その後客員で嘱託でお世話になって、去年の春から福知山の公立大学、皆さん、福知山公立大学ご存じの方。

一同：はい。

谷口：おお、すごい、ありがとうございます。ご存知でない方はぜひ知っていただいて、お子さん、お孫さんにご推薦いただきたく思います。私はここでも変わり種で、まちづくりと言いましても、もう地域べたべたの学区のまちづくりとか、商店街のまちづくりをやっています。そういう意味では、最近のSI系、ソーシャル・イノベーションとはいろんなところがありますが、どちらかと言いますと、ソーシャルビジネスが多くて、テーマ型が多くて、そういう中で、本当にべたべたの住民の自治活動の一つ一つ、ブラッシュアップして立てていただいています。ここにも新川先生に呼んでいただいて、とてもありがたかったなと思っています。そういう意味では、メッセージにまだまだと書いた

のですが、その部分は僕自身がほとんどできていませんで、ソーシャル・イノベーションの分野でも、これからまだまだ大事に実行すべきことがたくさんあるかなと思ったりはしています。

福知山の話をしなると、商店街に住んで唯一残った銭湯をどう維持するかとか、そういう取り組みをしたりとかしています。京都が良かったなと思ったりします。どこに行っても人がいますし。でも福知山は本当に涙が出るほど美しい、平家の落人集落や、里山があって、もう今、5世帯だけで全部高齢者だったりとか、また築50年のとても美しいアーケードがあって、でも、全部シャッターが降りているとか。住民自治活動は、洪水の災害が多いんですけども、盛んでした。今は担い手がない自治会とかがあって、でも、訪ねていくと、例えば、そういう里山を若い人が大好きになって住んでいらっしやったりとか、商店街で、喫茶店で頑張っている方いらっしやる若い方がいたり、自治会でいやいやな役員だけでも、LINEを駆使して若者を役員に集めている方がいたりとか、一つずつ見るとすごく頑張っている方がいらっしやるのです。

そういう意味では、イノベーションは地域で起こっているんですけども、捕まえてきれてない、ということに福知山に行って気づきました。ぜひ、そんな活動をご一緒に考えていきたいな、したいな、と思われる方は…

「ゴーン」(3分経って鳴らされたゴングの音)

谷口：失礼しました。頑張りましょう。(拍手)

大石：大石と申します、よろしくお願ひいたします。私はSIコース2期生で、今里ゼミでお世話になりました。もともとは土からのものづくりということで、綿を育てて糸を紡いで布にするということを社会化しようということで取り上げています。

時々昔の写真を見るんですけども、社会実験をしたときに今里先生が来てくださって、その姿がスーッ姿なんですね。今は、見られたことがないと思います。その当時はスーツを着ておられて、そのころから、うさとの服になったのかなと思うのです。ちょっと先生のSIに私は関与したのかなと思っています。

今は龍谷大学の政策学部の方で教鞭をとらせていただきまして、まさに食と農によるソー

シャル・イノベーションということを掲げまして、ゼミ生とともに、奈良で、この近隣の中山間地に入りまして、農業をします。実際に学生が種をまき収穫をして売ります。汗をふきながらやるということとして、現実の農業の大変さであったりとか、やりがいということを通して、彼等がたくましくなっていけるような、活動をずっとやっています。

今は本当にAIが浸透してきて、これから働き方が変わる、職がなくなっていくという、すごく本当に世界が変わっていくステージに今、私たちがかかわっている、学生がいるということですが、やはりその中でも土は変わらない。農業や、ものをつくっていくというところは、決して変わらないところです。そこから、学生を育てていきたいなと思って、活動を進めています。

これからのSIコースですが、先ほども社会人の方が多くということだったのですが、ぜひ、若い学生、大学生、高校生でもいいですが、どういう人材に育てていくかということに、ぜひ、力を注いでいただきたいと思っています。大学の教員として精一杯のことをやりたいと思います。人を育てるといのは社会を育てるといこと。その一人ひとりが育って、社会に出たときに何をするかだと思のです。それは、大学生だったり、高校生で感動したり、それが次につながると思っています。皆さん、ぜひ、一緒に社会を変えていくという中で若者たちにぜひ、力付けをしていきたいと思っています。以上です。(拍手)

関根：関根でございます。谷口先生の後任という形で、2012年から2017年、今年の3月までこちらで先生をさせていただきました。半年後、この秋から客員教授でまた戻ってきますので、皆さん、授業に来てくださいな。

ももとの専門はユニバーサルデザインとgerontology、老齡学です。女の人や子どもたちは高齢者や障害のある人、外国から来た人、そういう人たちがどんなふうにしたら、日本の中で楽しく、明るく暮らしていけるか。そんな社会を考えるのが私の専門でもありました。本当に、この5年間実際に来させていただいて、私のほうこそ学ぶことばかりでありありがとうございました、とひたすら言いたいです。

外に出てみてしみじみ、すごいと思うことが

いっぱいありました。私は7つの大学で教えているんですけど、プログラミング教育とかやって、東京大学でかなり関わっているんですね。その高齢社会総合研究機構の中で、リビングラボといって市民が中心になって世の中を変えていくというのを、これからどう進めるかという研究に入っているのです。その中で言われます。いや、エビデンスですよ。これからはアクションリサーチです。社会関与だ。そんなのSIで10年前からやってたじゃん、と思うのです。

次には、例えば、私たちは、これまでヒューマンセンタードデザインとかユーザーセンタードデザイン、人間中心設計機構とか言っていたんだけど、今はシチズンセンタードデザイン。市民が中心だ、と言っているんです。そんなの先生がさっき言っていた市民中心の社会、10年以上前から言っていたじゃん。SIの方がはるかに早いのです。東大が今、追いついている。

そう考えると、ソーシャル・イノベーションのコースのこれからというのは、私は少しも心配していません。先生方が早すぎた。だけど、それは言ってみれば、リーディング、トップリーダーとして、フロンティアをつっぱしっていたわけですから。それをわれわれは引き継いで、この後のSIコースというのを、例えば、宗田先生とか、大石先生とか、若い人たちが引っ張ってほしいなと思います。

だから、きっとこれからは、ソーシャル・イノベーターを育成するというだけではなくて、それを支援するグループ、いろんな大学の中にソーシャル・イノベーションコースをつくっていくというのも、私たち卒業生の仕事なのかなと思います。だから、中野先生もそうやっていらっしゃるし、谷口先生もそうだと思う。私も自分の教えている大学の中では、世の中の課題を考えて、それをどうやったら解決できるかというのを考える。それを回りに伝えていく能力を持った学生たちを育成していきたいと思っています。それこそが、SIで、ここで私が学ばせていただいた5年間の総決算かなと思います。本当にどうもありがとうございました。(拍手)

本多：本多です。私は同志社大学に入る前3年間、京都大学で研究生として哲学の勉強をしていました。それはJürgen Habermasの公共空間論でした。なかなか難しかったんですけども、

研究のしがいのあるテーマでした。それで、大学院に入れていただいて15年目になるのですが、今里先生のゼミ生になって、今回、SIコースができたということもあって、江湖館がソーシャル・イノベーションの公共空間の場となった。そしたら、Jürgen Habermas（ユルゲン・ハーバーマス）の公共空間論を実践できる場だと思ったんです。それで、私の博士論文は公共空間の理論と実践ということでまとめたんです。

SIの入学生の方は、ほぼ半分ぐらいは私のネットワークで入っていただいております。それは、たぶん、自分がどうにかしようかなと思ったのは、コミュニケーションが大事で、人とのつながりがすごく大事だと思ってまして、一つずつ自分自身何ができるわけではなかったんですけども、人とのつながりを大事にしようと思って、それが、今日のつながりになったのかなと自分では思っているところです。

あと、先生方と共に70歳になったら、同志社から一切手を引くことになるんですが、次に何をしようかなと思っているのは、小さな塾をしようと思っています。ちょうど小学校の前にうちのマンションがあって、その1階に空いているところがあります。では、どういう子どもたちを育てることをしようかと思ったときに、ちびっこソーシャル・イノベーター、やはり社会のためになるような子を小さいときから生きる力とともに、そういうことを意識づけることを小さな町の端でもできたらいいなと思っています。私の孫が2歳3ヵ月ですが、毎日、論語のCDを聞かせています。(笑)

それは、何のために生きるかということです。私は自分の子育てのときは勉強を頑張りなさいしか言えなかったんですけど、やはり利他のため。利他を意識する子になってほしいと思って、今、そういうことをしています。自分の孫だけではなくて、地域の子どもたちにもなんとかそういうことを伝えるようなことを残りの人生、少しでもできたらいいなと思っているこのごろです。ありがとうございます。(拍手)

佐野：せっかくなので、私も少しだけおしゃべりいたします。今日は司会役で来ておりますが、今は一人のパネリストとしてお話をします。

私も去年からSIコース教員として同志社大学に赴任し、早くも1年半たちました。時の流れは早いものです。私も5年間の任期つき教員

でして、残り任期があと3年半と思うと、もうあまりないなと思って焦っているところです。そうなんです、あと3年半で、新川先生、今里先生も定年退職され、同時に私も任期終了となります。それまでどれだけSIコースを盛り上げていけるのか、という問題意識で、今回のSIコース10周年の記念イベントを企画させていただきました。教職員から院生、修了生まで、いろんな関係者が集まって語り合える場がほしいね、ということで今回企画させていただいて、こうして実現にこぎつけるまではなかなか大変でしたが、何とか今日の開催にたどり着くことができ、大変うれしく思っているところです。(拍手)

この開催直前の1週間、連日深夜まで準備をした甲斐がありました。このSIコースのコミュニティは本当に大きな力だと思います。私は大学院の授業で、「社会的ネットワーク論」を担当させていただいています。人間というのは、価値観が近い人どうしでグループをつくったり、またネットワークを編んでいく傾向があります。さらにそうした多様なグループや個人をゆるやかにつなぐ「弱いつながり」が、この社会全体を構成しています。この社会的ネットワークによって、地球社会全体がつながれているわけです。

そしてこのSIコースのネットワークというのは、社会関係資本の理論でいうと多様なグループや個人をつなぐ「橋渡し型」の社会関係資本に分類されると思います。それぞれが自分のコミュニティやグループに所属しながら、その同質性の高い固有のコミュニティの中だけではわかり得ない情報や生まれてこないアイデアを、このSIコースのネットワークに集まることによって共有し、そして相互作用しながら化学反応を起こす学び合いの場が生まれています。そして私たち教員は、単に知識を伝達するだけでなく、そうした学びのネットワークが自己組織化し、生成していく場のサポート役であり、ファシリテーターとしての役割がとて大きいと感じています。私自身で言うと7割ぐらいがファシリテーターの役割で、3割ぐらいがいわゆる従来型の教員の役割かなと感じています。それだけこのSIコースは、院生・修了生の皆さんが相互に学び合える、経験と知識のネットワークとしての場の力がすごく強いので

す。

そしてこのネットワークそのものが、ひとつの社会的生態系として自己組織化されることにより、皆さん自身のキャリアや生き方もどんどん広がり、それが総体として社会に大きな影響を与えられるものになっていくと思います。そしてこの社会的生態系としてのSIコースのネットワークから、新しい価値観が生まれ、社会に伝播していくような場として、これからもずっとこのネットワークを育て、続けていければいいなと思っています。

この「ソーシャル・イノベーション学」をこれから広げていくには、どうすればいいのでしょうか。これはすごく力を持った資本家であったり、政治家が中心になってやるものではなく、また学者が中心になるものでもなく、実践者と一人ひとりの市民が主体となって進めていくものだと思います。例えば、地域に病児保育の場がほしい、様々な障害を持ちながらも生き生き働ける場がほしいといった、「こういう生き方がしたい。こういう社会がほしい」という一人ひとりのつぶやきの中に社会課題があり、そしてそこにソーシャル・イノベーションの種があるのだと思います。社会を変える源泉は、決して政治家ではなく、私たち一人ひとりの市民の中にある。そうした一人ひとりのつぶやきや思いの種をつなげて、社会を変えるためのネットワークを編むことによって、今の社会の当たり前を、そうじゃない「新しい当たり前」に変えていく。それが、ソーシャル・イノベーションではないかと思うのです。それをもっと学問として、これから突き詰めていきたいと思っています。(拍手)

さて、あと15分ぐらいありますので、参加者のみなさまもどうぞ自由にお話ください。お話されたい方は、こちら内側の輪に入ってきていただいて空いている席にお座りいただいて、ご発言いただければと思います。

笠間：ソーシャル・イノベーションコースD2の笠間です。新川先生にお世話になっております。同志社女子大学の教員をしております。本当に今、大学の教員が改めて学びの場をつくる、そういう時代なんだなと感じております。

私自身は専門は幼児教育で、特に子どもの遊び、遊び環境と子どもの成長・発達です。さらにその中でも、今日は「土」の方が多くて言い

にくいんですけども、私の専門は「砂」、すなわち砂場です。

実はこんなものにも歴史がありまして、例えば、1885年ボストンのパーメントストリート20番地、ここにアメリカで最初の砂場が作られた。それから、今、全世界の児童公園の始まりになります。スラム街の子どもたちのために作られた砂場です。私は自分の子どもが3歳のときに、30分以上、集中して遊ぶ姿から、なんでこんなものに夢があるのかを疑問に思いまして、30年近く砂場の研究をしています。

とにかく、こういった素晴らしい歴史に裏打ちされた遊び環境を大事にしていきたいと思っています。ところが、今、犬猫の問題で、砂場には向かい風が吹いています。そういう中で何とかそれを広げていきたい。そのときに、2011年東日本大震災が起りまして、福島県は放射能汚染の問題から一時外遊び、特に砂場活動が失われかけました。

ところが、いったん失われかけたときに、人々が当たり前と思っていたものに、もう一度その価値を見つけ出し、ぜひ、これを取り戻したい、という動きになりました。私は震災の11月以降、ほとんど毎月1回、今年は、研究年で福島大学に客員研究員としても行っておりますが、砂場の取り戻しと、単なる取り戻しではなくて、本当に面白い価値付けをしていこうということで、向こうの親御さん、行政、さまざまな方々とつながる中で、だんだん保育学、教育学では物足りないということから、このソーシャル・イノベーションコースに寄せていただき、学んでいるという状況です。

あとは、向こうでは先ほど、今里先生がおっしゃいましたが、教育学ということで同志社女子大学現代社会学部現代子ども学科というところで教員養成をしています。本当に子どもたちはいろんな問題を抱えていますが、そこに関わる教員、そこからイノベーションを起こしていかないといけない、ということをつくづく思っています。本当にその通り。それで、私たちは4つのP、Passion、Peers、友達、仲間、そして、Projectを作り上げる、そして、それをPlayfulにやっていくということを私の同僚が言っている。この流れで新しい教育学を作っていきたいな、とここでの学びをそこに生かしていきたいと思っています。ありがとうございます。

ました。(拍手)

A: 失礼します。一般参加者なんですけど、関根先生の講義を聴講させていただいています。私が今、住まいしているところが、実に古い京都の下町でした。いろんな因習といいたいでしょうか、縛りがあります。で、その中で自分は何ができるかということをごちんちん考え初めているのですが、一人の力じゃやっぱり難しいなというのは、今日来てみてもすごく感じました。

で、話はバラバラするのですが、自分は元中学教員です。でも、いろんな挫折があって辞めてしまいました。で、もう1回やろうと最近思い初めてはいますが、20年ぶりで通用するのかなと。すごくそういう不安もあります。生き方も含め、先ほど関根先生は夢があるのは素晴らしいねとおっしゃったけど、私はたぶん、具体的に夢を描けないような気がしています。それで、いろんなところに出向いていっています。学びたいという気持ちを持っているからこそ、今日も来てみたんだなと感じています。

新川: 学びたい夢があれば十分です。

A: ありがとうございます。先ほどの現役院生の皆さんが、いろんなことをお話になったのを聞いてみると、すごくダイナミックだなと思っています。また、自分の個人的なことですが、女子大出身だったものですから、そういうダイナミズムを経験しないままきているな、というのを非常に感じました。それで、当時自分が何かを求めて動いてなかったんだなというのを感じますし、これまた個人的なことですけど、来年還暦を迎えるんですが、それを前にやっぱり生き方をもう一度考え直したい。

何かちょっとやりたい。こちらの問題もいろいろございますが、この場をお借りして決意をいろいろ考えています。(拍手)

佐野: 素晴らしい。ぜひ一緒に。

関根: ちなみに私の授業は社会人の聴講生がすごくたくさんいて、94歳のゲストスピーカーもよく来ますので。

B: 私は総合政策の第1回の卒業生です。20年前というのでしょうか。それで同窓会の会長もさせていただきました。そういうので、会社を退職して次は何をやるかということを考えて、それで入ったということがあります。非常に私自身は勉強になりました。私自身は、マルチメディア、インターネットマルチメディア社

と女性の仕事ということでやりました。情報化ということで女性の仕事は普通すぐくやりやすくなるだろうということでもやりました。非常に女性の仕事も変わってきました。

さて、現在はどうだろうかということをもう一度まとめたいというのが自分の中にはあります。それで、ちょっと今日は福知山の谷口先生と、初めてお会いしました。私も福知山の出身です。それで、今日はシャッターが降りているとか、そういうことをいろいろお話が聞けてうれしかったです。

ただ、そういう表向きの動きと同時に、皆さんご存じないかもしれませんが、今、結構大変なことが福知山では起こっています。それは、経ヶ岬というのが丹後にあります。あそこの米軍兵士たちが今までは富士の裾野ですかそこに行って年2回、訓練して免許を取っておかないといけないとかあるんですね。富士の方に行っていたのです。そしたら、それが時間がかかる。費用がかかるということで、彼等が注目したのは、福知山には自衛隊があります。そこには、射撃場があります。そこなんです。そこに来て、実はもうやっているんです。自衛隊の人たちは検査というのは年1回なのです。それが年2回来ています。それでたまたま昨日聞いた話では、射撃場のそばに自衛隊の設備があります。そこには、何か上から落下傘が何か知らないけれども何かで降りてきて、射撃場の練習をするとか。そういうことが行われていることを私は聞きまして、これは本当かどうかを確かめる必要があるんですけど、非常に恐ろしいと思いました。

だから、非常に楽しいというか、上からのいろんな活動と同時に、そういうバックグラウンドがあるということをぜひ、認識しておいていただきたいと思います。以上です。(拍手)

佐野: ありがとうございます。会場に高校生の方が来ておられます。ぜひ、いま思っていることをお話ください。

C: 皆さん、はじめまして、京都の高校に通っています、高校3年です。私は来月からフィリピンに1人で移住して、現地のNGOと企業さんと一緒に今、立ち上げているお弁当屋さんで貧困地域に暮らす女性の、お母さんたちの就労支援を行っていかうと思っ、そのために行きます。

実は私は保育園からずっと京都に暮らしてい

るんですが、小学校のときはすごく地域との連携が取れている学区だったので、授業が終わった後の放課後の総合学習とかで地域のホームステイを受け入れている家庭にお邪魔して、茶道とかお琴とか、現地のアメリカからの大学の先生のお話とかを聞くという経験が普通の公立の小学校でもできたのです。そこから今は私立に通っているのですが、やはり受験のためだけの勉強とかだけでは、さっきおっしゃっていた子どものソーシャル・イノベーターとか、そういう子どもたちは明らかに普通に勉強していたら、気づかない出てこないだろうという学校教育だとすごく感じています。高校1年のときにフィリピンに行ってから、すぐに学校でやっていた朝6時半から8時までずっと学校で勉強することはやめたんです。で、今はどこの大学に行こうかなと考えたときに行けるところがないなと思いつながら、フィリピンに決めたところもあります。

2つにあるのは、もっと行政とか高校が連携して、高校生たちが社会問題とかに触れていけるような授業とかを採り入れてもらうことによって、SIコースとかにもっと若い人たちが入ってくれるようなものになっていくのではないかな、と思います。実際、私も今回こういう場に来てみて、将来何年後か、フィリピンの大学に4年間行くんですけど、1回日本に帰ってきて、こういったところで授業とか受けていこうと思いました。なので、ぜひこれからもSIコースを残してください。お願いします。(笑)(拍手)

佐野：これはSIコースをずっと残さないといけないですね。素晴らしい。誰よりも力強い意見が出ました。

今里：教える側になりなさい。

佐野：じゃあ、ぜひ入学を待っていますね！では、時間になりましたので、全体のまとめをさせていただきます。このSIコースのネットワークの持っている力と意味というものを改めて感じ、みんなで結実して思いを一つにできた場ではなかったかなと思います。またこうした場を通して互いの想いがつながっていきますので、各人それぞれの現場で実践を広げながら、時々こういうふう集い、お互いの現場実践についてシェアし合えればと思います。

それではこれで、フィッシュボールは終わり

にしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)



写真 フィッシュボール風景

全体講評

佐野：最後に、今里先生と新川先生から、1分程度になるのですが、今日の場の全体講評をいただければと思います。では先に今里先生からご講評をお願いいたします。

今里：先ほどの高校生の方が残してくださいと。あれで胸がいっぱいになりました。(笑) 気をつけてフィリピンに行ってください。

C：はい。

今里：大きくなって帰って来てください。(拍手)

新川：改めまして、今日は本当にいい時間をたくさんいただきました。ありがとうございました。(拍手)

教員としても、そしてこのSIとともに10年、実際には12年目ですが、私自身とても幸せに思いながらここにいますが、同時にこれだけの方にこうやって共感をしていただけるソーシャル・イノベーションを本当にやってよかったなあと改めて思いました。これから、むしろ、ここでせっかくこういう形でできたネットワークや、そして、ここでのそれぞれの思いというのがもともと大きく広がって、そして、大きな果実になっていけばと改めて思っています。そのためにも、私自身についていえば、今里さんや本多さんと同じく、あと限られた期間です

がその間に何ができるか。やれる限り走り続けたいと思っています。

そして、それが終わりではなくて、たくさんの方と一緒にさらにこのソーシャル・イノベーションとその世界をきちんと先々にまでもり立てていけるような、そんなことも考えていきたいと改めて思いました。

今日のこの集まりを大きなきっかけにして、10年後のソーシャル・イノベーションというのをみんなでつくっていく。そちらに向けて次の一歩を進めていければ、そんなふうに変更していただきたいと思います。皆さんと一緒に歩んでいきたいと思います。今日はありがとうございました。(拍手)

佐野：ありがとうございました。以上をもちまして、同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーションコース10周年記念フォーラムを閉会させていただきます。ありがとうございました。(拍手)